

氏名	江藤 祥恵
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）
学位記番号	博甲第 8294 号
学位授与年月	平成 29年 3月 24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	医療施設内の看護者と高齢患者における会話ケアの実態とその効果に関する研究
主査	筑波大学准教授 医学博士 柳 久子
副査	筑波大学教授 医学博士 斎藤 環
副査	筑波大学教授 博士（ヒューマン・ケア科学） 松田 ひとみ
副査	筑波大学教授 博士（工学） 川口 孝泰

論文の内容の要旨

江藤 祥恵氏の論文は、看護者と高齢者の会話ケアの実態とその効果を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

【第1章：緒言】

緒言では、医療施設内の高齢患者において看護者との会話のニーズがある一方で、看護者においては高齢患者との会話は看護実践に位置づけられ、看護の本質であるにも関わらずケアとしての認識が低い現状をまとめている。著者は、専門職である看護者が高齢患者と交わす会話について会話ケアとして注目し、会話ケアの実践に関連する看護者の課題を明らかにする必要性を述べている。本論文全体の目的は、会話ケアを構築するために、看護者と患者との会話ケアの実態を明らかにすること、看護者の特性に注目し会話ケアの構造を探ることであると述べている。

【第2章：高齢患者に対する会話ケアの効果に関するシステマティック・レビュー(研究1)】

1.目的・方法

著者は高齢患者への会話ケアに関する介入方法と、その成果及び課題、看護者に与える影響を明らかにするために、システマティック・レビューと効果量の算出を行っている。

2.結果

会話ケアは認知機能の低下した高齢者の情緒の安定やコミュニケーションの促進となること、リラクゼーションやBPSD改善の可能性があることを述べている。さらに、看護職—患者関係に注目し、会話ケアが高齢患者のみならず看護者へ影響を与える可能性を探り、質的研究による報告が多く、量的研究が少ない現状をまとめている。

3.考察・結論

会話ケア推進のために、今後は看護者への影響や看護者と高齢患者間の相互作用についての調査が必要であると結論付けている。

【第3章：看護者と患者との会話ケアの実態調査(研究2)】

1.目的・方法

看護者の視点から会話ケアの実態を捉え、その構造と効果に関する要因を明らかにすることを目的としている。看護者を対象にアンケート調査(看護者の基本属性、会話に関する質問項目、共感性、職務満足、健康関連 QOL(PCS、MCS))を実施している。会話ケアに関する認識について因子分析、Kiser-Meyer-Olkin(以下 KMO)、Bartlett の球面性検定、クロンバック α 係数の算出、因子の下位尺度得点を参考に群分けを行い、看護者の特性のうち関連する要因を分析している。

2.結果

因子分析の結果、看護者の会話ケアに関する認識について 3 因子を見出している(KMO=.794、 $p<.001$)。第 1 因子は「具体的な改善」($\alpha=.793$)であり患者の認知機能や抑うつ改善、第 2 因子は「問題解決」($\alpha=.805$)であり患者の満足感、第 3 因子は「看護者の満足感」($\alpha=.745$)であり看護者のストレス軽減から構成されている。看護者の特性との関連性については、「具体的な改善」は性別($p=.003$)、PCS($p=.026$)、「問題解決」は年齢($p=.001$)、勤務月数($p=.001$)、役職($p=.004$)、教育年数($p=.004$)、MCS($p=.035$)「看護者の満足感」は共感性のうち空想($p=.013$)と関連があったことを報告している。

3.考察・結論

著者は、会話ケアには看護者の年齢や臨床経験、精神面のような内面性が関連していることを明らかにしている。また看護者は、患者や看護者自身に対する会話ケアの効果を実感していたことから、専門職である看護者が患者と交わす会話にケアとして注目する意義があると結論付けている。今後は会話ケアの認識に影響する看護者の特性を明らかにすることを課題としている。

【第4章：看護者と高齢患者との会話ケアと看護者の特性との関連(研究3)】

1.目的と方法

高齢患者との会話ケアについて、看護者のキャリア発達との関連性を非逐次モデルによって検討している。研究2の調査内容に加えて、特に会話ケアの認識についての質問項目を追加し、詳細なアンケート調査を行っている。因子分析を実施し、導き出された因子を従属変数、看護者の特性を独立変数とし重回帰分析を行い、共分散構造分析によりモデルを検討している。

2.結果

因子分析により 5 因子が見出された(KMO=.885、 $p<.001$)。第 1 因子は「会話ケアの効果」($\alpha=.900$)であり高齢患者の睡眠や認知機能、抑うつ改善、第 2 因子は「看護者の満足感」($\alpha=.883$)であり仕事のやりがい、高齢患者への敬意、双方向の会話、第 3 因子は「高齢患者の満足感」($\alpha=.762$)であり精神的充足感、第 4 因子は「看護ケアの波及効果」($\alpha=.669$)であり他の医療者や看護計画への反映、第 5 因子は「高齢患者の語り」($\alpha=.771$)であり高齢患者が昔の話を楽しそうに語ることから構成されている。重回帰分析の結果を参考に、5 因子を観測変数とし看護者の年齢と職務満足度による影響を示した非逐次モデルを見出している($\chi^2=40.533$ 、 $p<.001$ 、AGFI=.924、RMSEA=.088)。

3.考察・結論

著者は、高齢患者との会話ケアは看護者の年齢(若年者、年長者)により相違があるとしている。若年者の会話ケアは双方向であり、高齢患者との関係性を重んじた実践であること、年長者は、高齢患者への効果を念頭におき、自らの満足感是他職種からの評価を介し間接的に得る傾向にあり、臨床において職責を果たすことや成果を求められている可能性を論じている。また、会話ケアに関する質問票の一般化と妥当性を確保することを課題としているものの、「看護者の満足感」は会話ケアの他の因子へ、職務満足度は「看護者の満足感」、「看護ケアの波及効果」へ影響を及ぼしており、会話ケアの実践を促進する重要な要因として明らかにしている。

審査の結果の要旨

(批評) 江藤 祥恵氏の論文は、これまであまり注目されていなかった看護者と高齢者の会話ケアに着目し、その実態と影響を検討した点が優れている。会話ケアには看護者の経験年数や内面性が関連していることを示した後、会話ケアと看護者のキャリア発達との関連性を非逐次モデルによって検討し、職

務満足度が会話ケアの実践を促進する重要な要因であることを明らかにした点は特に高く評価できる。

平成28年12月8日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(ヒューマン・ケア科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。